

はじめに

2007年6月

情報社会学会会員の皆様

『情報社会学会誌』第2号をお届けします。第2号では原著論文として三つの論文を収録しています。まず、倉谷・渡論文は、公衆回線網が交換機系からIP網に切り換わるという時代の趨勢にあって、トラブルに強いIP電話網の構築シナリオを描くという時宜を得たものです。次の広瀬・市川・山本論文は、WBT (Web-Based Training) 技術によるe-Learningを題材にしたもので、復習を目的とする補助教材として、静的コンテンツと動的コンテンツのWBT教材を与えると、多くの学習者は静的コンテンツを使うことや、テクノ依存症的傾向が強い学習者は、補助教材としてWBT教材を与えても、かえって利用しない傾向にあることを実証しています。三つ目の舟橋・内田・小松論文は、電子会議のデータにジップ分布を回帰させたときに得られる回帰式の傾き (b) と決定係数 (R^2) を、会議のトピックの性格分類に適用するという斬新な試みを行なって、暫定的ながらきわめて興味深い結果を得ています。以上の論文は、2月17日のシニアエディタ研究会で、執筆者が口頭で報告し、本誌編集委員の審査を受け、その後、さらに論文の推敲を経て掲載が決まったものです。情報社会学会では定期的にシニアエディタ研究会を主催し、会員の皆様からの論文投稿をお待ちしています。

続いて本号では「世界システム」を特集しました。社会システム、とりわけ最大の社会システムとしての世界システム (World System) をめぐる諸問題は、情報社会学の大きなテーマです。

まず、ワシントン大学を拠点として、われわれと相互交流を保ちつつ研究しているモデルスキー教授は、世界システムの進化こそ「グローバル化」に他ならないという立場から、10世紀に始まり23-4世紀に完了する世界システムの進化過程のモデル化を試みています。次に、マーストリヒトのシルバーク教授は、世界システムの進化過程にみられると主張されている「長波」が、データのどこまで検出可能かを、スペクトル分析のいくつかの手法を適用して検討し、否定的な結論を導き出しています。

ロシアのコロターエフ教授は、世界システムの成長のもっとも基本的な指標として人口を選び、紀元前500年から現在までの人口増加過程のマクロ的なトレンドを、2本の微分方程式によって説明しています。その一本はよく知られているロジスティック・モデル方程式ですが、その式において生物学では定数とみなされてきた「環境収容力 K 」(これが、種のポピュレーションの最大可能値を決める) が、ヒトの場合は技術進歩——というよりわれわれなら知識増加と言いたいところですが——の形で増加する変数とみなすことができるので、 K の増加過程を説明する2本目の微分方程式を追加することで、ヒトの人口増加過程モデルを完結させています。その結果えられた人口増加トレンドは、みごとなS字波を描いています。

これに対して山内論文は、近代は16世紀後半に出現し、18世紀後半に突破して20世紀後半以降成熟に向うとする公文の近代化三局面論——それはもともとヨーロッパの近代化過程に準拠した議論ですが

—をもとにして、そのより立ち入った展開を試みています。そのさいに、そこで近代化の過程を形作っているものは、いわゆる「長波」ではなく、重畳する一連の「S字波」であるという観点をより明確に打ち出しています。

今回、収録した海外の研究者の研究成果を、われわれの情報社会学のコアになる枠組みとどう摺り合わせるのかは、今後の研究課題ですが、ここでとりあえず予想を述べておけば、これまでのヨーロッパ準拠型の近代化モデルを、以下のように拡張することによって、整合的な解釈が可能になると考えられます。つまり、

1. 最広義の「世界システム」とみなすことができる、ホモ・サピエンスの社会の進化過程は、S字波のトレンドをもつ人口成長過程によって要約できる
2. 最広義の世界システムの「突破局面」(10-20世紀)は、広義の(つまりグローバルな)近代化局面(のうちの出現と突破の局面)に対応する
3. 広義の近代化局面の「突破局面」(15-20世紀)は、狭義の(つまりヨーロッパ主導の)近代化局面(のうちの出現と突破の局面)に対応する

という形でS字波の重畳を考えることが可能なように思われるのです。

このように近代化と世界システムを、より広いパースペクティブから結び付けて見ることは実り多いかもしれません。たとえば日本のイエ社会の進化論を、梅棹の「文明の生態史観」と結合させることで、日本の(そしてヨーロッパの)「広義の近代化」過程が、10世紀ごろから開始されたとする解釈をとることが可能なのではないのでしょうか。つまり、ヨーロッパの「封建化」過程と日本の「イエ社会化」過程を、ともに広義の近代化の「出現」局面とみなすことができます。さらにその後、似たような社会進化過程、すなわち有史宗教が支配する「帝国」の内部、とりわけ周辺部で、地域的な自立・自律化に向う動きは、ヨーロッパと日本だけでなく、中国やアラブ、アフリカ、アメリカ、琉球等々でも、相前後していっせいにみられたのではないのでしょうか。そこにヒトの「近代」の「適応放散」過程が始まったのですが、やがてそれらが支配・制御型の文化をもつヨーロッパ近代によって淘汰され、征服されていくことで均質化が進みました。極東の島国だった日本は、協調・適応型の文化を基調とするにもかかわらず、その地理的位置も幸いして、比較的長くヨーロッパの支配から自由なままに残り、後に適応過程の一環として、西欧化を急速に進めたにもかかわらず、協調・適応型の文化基盤を存続させることができたと考えられます。

21世紀に入り、世界システムは、最広義の近代化、広義の近代化、狭義の近代化のすべてにおいて、いっせいに「成熟」局面に入りつつあります。そこでは、支配・制御型の文化と、協調・適応型の文化とが、最終的に統合される文化面でのグローバル化の発生する可能性が高いのではないのでしょうか。その中から、近代化の三つの意味のすべてにおいて、「近代を超える」ポストモダンの文明が誕生してくるかもしれません。それらのより立ち入った考察は情報社会学の今後の課題となるでしょう。

情報社会学会 会長 公文俊平